

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ジョージ・オーウェル『一九八四年』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 27 回のツイキャス読書会の課題図書は、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

1950年代に発生した核戦争を経て、1984年現在、世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの3つの超大国によって分割統治されている。さらに、間にある紛争地域をめぐって絶えず戦争が繰り返されている。作品の舞台となるオセアニアでは、思想・言語・結婚などあらゆる市民生活に統制が加えられ、物資は欠乏し、市民は常に「テレスクリーン」と呼ばれる双方向テレビジョン、さらには町なかに仕掛けられたマイクによって屋内・屋外を問わず、ほぼすべての行動が当局によって監視されている。

ロンドンに住む主人公ウィンストン・スミスは、真理省の役人として日々歴史記録の改竄作業を行っていた。物心ついたころに見た旧体制やオセアニア成立当時の記憶は、記録が絶えず改竄されるため、存在したかどうかすら定かではない。スミスは、古道具屋で買ったノートに自分の考えを書いて整理するという、禁止された行為に手を染める。ある日の工作中、抹殺されたはずの3人の人物が載った過去の新聞記事を偶然に見つけたことで、体制への疑いは確信へと変わる。「憎悪週間」の時間に遭遇した同僚の若い女性、ジュリアから手紙による告白を受け、出合いを重ねて愛し合うようになる。また、古い物の残るチャリントンという老人の店を見つけ、隠れ家としてジュリアと共に過ごした。さらに、ウィンストンが話をしたがっていた党内局の高級官僚の1人、オブライエンと出合い、現体制に疑問を持っていることを告白した。エマニュエル・ゴールドスタインが書いたとされる禁書をオブライエンより渡されて読み、体制の裏側を知るようになる。

ところが、こうした行為が思わぬ人物の密告から明るみに出て、ジュリアと一緒にウィンストンは思想警察に捕らえられ、愛情省で尋問と拷問を受けることになる。彼は、「愛情省」の101号室で自分の信念を徹底的に打ち砕かれ、党の思想を受け入れ、処刑（銃殺）される日を想いながら“心から”党を愛すようになるのであった。

本編の後に『ニュースピークの諸原理』と題された作者不詳の解説文が附されており、これが標準的英語の過去形で記されていることが、スミスの時代より遠い未来においてこの支配体制が破られることを暗示している。ジョージ・オーウェルは、この部分を修正・削除するように要請された際、「削除は許せない」と修正を拒否した。

以上

『1984 年』 読書感想文

記憶、記録をのこす。

記憶、記録を失ってしまうと人間は新しいもの、今だけが真実と思うしかすべがなくなる。

比較が不可能になれば思い込ませることが可能になる。

書籍(記憶)を焼く autodafé という行為によって記録、記憶を消滅させ、独裁者、宗教家、、、が支配を可能にしようとしてきた。

思考力がない人間は(にさせられると言うことは)洗脳容易い。

グーテンベルグの印刷の発明、テレビはインターネットの先駆けで最初は知識レベルを高くしてくれるすべとして賞賛されたにもかかわらず大衆化するにつれ洗脳武器として利用されるようになってしまった。

インターネットがすでにその武器として利用されていることには目を背けられない。

しかしこの先の世界は既にインターネットを無視出来ない所までできてしまっている。

マインドコントロールされる事を避けなければなりません。

考えることを阻止されてしまったら人間は愚かになり利用され易くなる、それに気づいた誰かが悪の塊であれば、悪を奉るために利用する。

愚かな者を支配出来るという状況におかれた人間が、善より悪を選ぶ事は、今日までの歴史を手繰ってみるとその確率性の高さが理解できる。

(スターリン、ヒトラー、マオ、ポルポット、、、)

教育がいかに大切かですね。

マリのトンボクトウの住民が戦争の中、彼等に継承されてきた、古い書籍(記録)の 90%をイスラム過激派の手から守るため 1000 キロも離れた安全なダカーの図書館まで命をかけ運び出すことに成功したそうです。

この事実は彼等の教養の高さを示しています。

洗脳技術の高い悪魔イスラム過激派のテロリストに住民が洗脳されることが無かったのは先祖代々受け継いで来た書籍による彼等の知であったのです。

(おわり)

『ビッグ・ブラザーをやっつけろ！』

いきなり余談なのですが、カミソリの刃がなかなか手に入らず6週間も同じ刃を使い続けていたのですが、先日、たまたま寄った貧民街のマツキヨで運良く品薄のヴィクトリー・カミソリをやっと手に入れました。

使ってみて、早々に切れ味が悪くアゴが血だらけになる大惨事でした。

やはり、噂通りの切れ味の悪さです。

これから使う方は、取り扱いにくれぐれも注意して下さい。

と、こんなホラ話から書いてすみません。

『2+2=5』というと RADIOHEAD というバンドの 2003 年の曲があり、当時は、足し算がおかしいんじゃない？と思ったものです。

この国では、歴史の改竄もあるし、戦争の相手も同盟を組んでいたところと戦っていたり、実際には何が本当に起こっているのかがまったくわからないのが怖い。

そもそも、ウィルソン自体自分の年齢や、果たして今が一体何年なのかがわかっていなかったんですね。

党外局員はテレスクリーンを消せないのが、本当にお気の毒な感じがしました。

プロールって動物と同等という意味で爆弾に対して察知する能力が備わっているのでしょうか。

僕が不気味だと思ったのは、パーソンズの子供達の存在です。

ウィルソンが失ったものは何かを考えたら、単純にジュリアへの『愛』とオ布莱エンへの一方的な『信頼』なのかもしれないなと思いました。

全然違うかもしれませんが、オ布莱エンって、『沈黙』の井上筑後守で、古道具屋のチャリントンはキチジローっぽい感じがしました。

二重思想って本当にタチが悪すぎて吐き気がしましたが、良く考えたら僕も仕事上では自然に使っていたりします。

良いと思わないことを良いと言ったり。その逆も。

それと、映画版も見たのですが、作品は2つありましてオススメは1957年版です。モノクロ映画なのですが、テレスクリーンがうまく作られていてラブロマンス的に仕上がっていました。

1984年版は独裁政治色が濃く描かれていて、ネズミによる拷問シーンも小説のまま、悲惨でした。いやいや、危ない思想をこの機会に改めてくれたので、本当にありがたいです。

ビッグ・ブラザー万歳！

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『1984年』 読書感想文

～ 一片のナンセンスを別のナンセンスに差し替えるだけのこと～

物語の終盤、不条理な戦争の動向と勝利だけに、心の底から歓喜出来るようになった瞬間（101号室で、ジュリアを裏切り、空っぽな自分をジンでなんとか保っていた）ウィンストンに、完治へ向かう決定的な変化が起きます。

その場面の直前にP.460「母が姿を消す一ヶ月くらい前の事だったに違いない。和解の瞬間だった。」とあります。その後、母親、妹、ウィンストン、彼の幼い頃の幸せな記憶の記述が続きます。この後の記述が何度読んでも意味が分かりませんでした。（自分で創り出した偽りの記憶で幸せを味わい、真実であるネズミ関連の記憶を締め出したりと、息を吐くように二重思考が出来るようになって、党との和解の瞬間が訪れた。）という事なのかどうかと、まだ考え中です。

ウィンストンには、はっきり覚えているけど、恐ろしすぎて意図的に忘れてしまいたいと思っている記憶があります。ジュリアとの会話中、《その記憶の正体は遮ったジュリアのことだと結びついていた。》とあります。ジュリアはとんでもなく大きなネズミが子どもを食べると言おうとしていたのだと思います。（赤子の妹と弱っていた母親はネズミに襲われたのでは？）なのでウィンストンはねずみがこの世で最も恐ろしいものなのだと思います。

この小説のテーマはとても重たく真剣に考えさせられる反面、笑ってしまう箇所が所々満載です。口調が説教臭いオ布莱エンの名言。ジュリアから好きですと手紙をもらった後のウィンストンの頭の中の葛藤やビックブラザーをやっつけろ！と何度も書いていて急に恥ずかしくなるという描写等。愛情省でのオ布莱エン&ウィンストンの会話がとてもシュールで面白いと思いました。あと、パーソンズの汗とロンドンに染み付いた悪臭はドストエフスキー「罪と罰」より臭そうと思いました。

(おわり)

『 秩序は洗脳なり ウィンストンは我らなり 』

ふと、時計代わりに毎朝見ている情報番組でのdボタンで答えを送信するクイズを思い出した。最初は、とうとうテレビも一方通行から双方向になったのかとただ感心していた。しかし、この小説を読むとその考えが能天気なのかとゾッとした。

既にPCやスマホではカメラ搭載がノーマルで、遠隔操作でこちら側の映像が盗めるアプリやウイルスも存在する。PCやスマホよりも普及率が高いテレビにその機能が備わるとどうなるのか。まさにテレスクリーンではないか。徐々にゲームやクイズで双方向に慣らされた挙句、監視用カメラ付きのテレビに知らないうちに取り替わられるかもしれない。

「洗脳」というと縁遠いものと思ってしまうが、私たちは果たして洗脳されていないのだろうか？

例えば、信号機の色の意味も思い込まされて交通ルールが成り立つ。ひょっとすると、「赤が進め・青は止まる」という世界があるのかもしれない。よく、新興宗教に入信した人間を「洗脳された」とニュースになるけれど、その世界にいれば平常運転なのだ。その世界のルールが成り立っている。

私たちが、今の世界で「赤が進め・青は止まれ」と信じるようになったら、それは「洗脳」だろう。ウィンストンが「 $2+2=5$ 」と信じるようになったように。

しかし、「洗脳」の上に「秩序」が成り立っていることも否めず、私自身はそれすらも気がついていなかった。

「洗脳」とは、自分のいる世界に「違和感」を感じなくなったことだとこの小説で理解させられた。自分だけは「洗脳」されていないと確実にいえるのか。今、生きているこの世界に何の違和感も感じないのならば、誰もが「洗脳」完了だ。ウィンストンが死の間際にビッグ・ブラザーを愛していたように。

私も、自らがいる世界が正統で、他の価値観の世界を他人事のように眺めていた。この小説で「生きる」とはプロールたちのような自由意志であり、ウィンストンたちのように生きながら「死んで」いる場合があるということに、思わず我が身を振りかえざるを得なかった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『骨まで愛して』

困りごとを抱えて市役所に行ったとき、係の人によって全く対応が違うことを経験したことがある。何らかの制度を利用しようとすると、必ずそこに担当者がいて、その担当のフィルターを通してからしか事は動かない。教師と生徒の関係や、ドクターと患者にしても同じことが言えると思う。

困りごとを抱えている人と相談の受け手は必ずしも対等な立場ではない。この関係性は、特に相談の受け手にとって、二重思考のループへの入り口となる。対人援助職に従事していると、感覚麻痺に陥ることがある。何度も対応するうちに自分の感覚のフィルターに目詰まりを起こし、相手の立場を考慮する想像力に欠け、適切な対応を取ることが難しくなってくるのだ。

さらに発展すると、感覚麻痺は自己防衛の手段に転じてしまう。突きつけられた課題に対処できないジレンマが募ると、相談があったことそのものをなかったことにする人もいる。無意識でもいつの間にか揉み消している場合も想定される。そうして記録に残さなければ世間に明るみになることもないのだ。

二重思考への扉は決して重いものではない。案外身近に起こっている。私はこの小説を読んでそう思った。日常の慣れとは恐ろしい。

この小説を読んでの感想だが、ウィンストンの拷問シーンは、胸が砕けそうな気分になった。ウィンストンはかなり頑張っていたと思う。外の世界と隔離され、時間の感覚もない監房では、肉体の死すらも選べない。選択肢は二重思考を自ら会得し、オブライエンを骨の髄まで愛する道しかなかった。

「正気を保つことによってこそ、人類の遺産は継承される」というウィンストンの初心は、貫かれることが叶わなかった。

網越しの凶暴なネズミを前にして、最後の砦だったジュリアを裏切ったウィンストンの無念を思うと、いたたまれない気分だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『ジュリアに傷心』

ウィンストンは、ずっと思考警察にマークされていた。

オ布莱エンは、陽動作戦によってウィンストンをおびき出し、彼の思考犯罪を上手に告発する。『寡頭制集産主義の理論と実践』には、「二重思考」の秘密が暴露されていた。それは、『意識的な欺瞞を働きながら、完全な誠実さに伴う目的意識の強固さを保持する』という「二重思考」によって思考回路が混乱して、権力批判が不可能になるというものである。

党員のウィンストンにも、まだ人間性が、かろうじて残っていた。人間性とはなにか？ 個人の尊厳という重要な言葉がある。英語で言えば、尊厳は、dignityである。この言葉は、indignation（怒り）という言葉と関係があるのだ。個人の尊厳が、人間が人間たる本質だとすれば、人間は、怒らなくなったとき、もはや人間ではなくなる。

「二重思考」は、人間の怒りの感情を押さえつけ、自ら尊厳を譲り渡し、人間を人間以下の何者かにしてしまう考え方だ。

ウィンストンは、論文を読んで、党中枢が、権力を乱用している実態に怒りを感じた。しかし、党員である彼のこの怒りの感情を、最後の一片まで奪い去ることにオ布莱エンの企みはあった

ウィンストンが、ネズミを恐れるという感情を巧みに利用した。なぜ、ウィンストンがネズミを恐れるのかは、彼の『自己欺瞞の感覚』に関わっている。なぜなら、その理由を、彼自身がうすうす知っていたからだ。それは、『脳の一片をもぎとるほど死も恐れず頑張れば、それを明るみに引きずり出すことができたかもしれない。P223』のだ。

でも彼は、そうはしなかった。この弱点をオ布莱エンに突かれた。彼の『自己欺瞞の感覚』は、彼自身に復讐した。

ウィンストンはネズミを使った拷問に耐えなければならなかった。『脳の一片をもぎとるほど死も恐れず頑張れば、』そのとき明るみに出されるのは、人間の尊厳であったはずだ。

怒りによって、身を滅ぼすことは、この世界の人間が尊厳を守るために残された最後の選択だったはずだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>